

学生の研究空間・リフレッシュ空間の選択性に関する検討

正会員 ○前田明洋*¹ 同 大内 康平*²
同 須藤美音*³

大学キャンパス 研究空間 リフレッシュ空間
知的創造空間 選択性

1.はじめに

近年、グローバル化、地球環境問題の深刻化、少子高齢化、国立大学の法人化、教育の高度化等大学を取り巻く環境が大きく変化しており、大学の教育の在り方や運営方法に大きな変革が求められている。これらの環境の変化に対し国立大学法人施設においては、『新たな価値を生み出すキャンパス』と銘打ち、施設の有効活用の推進が求められている。文部科学省によると、国立大学法人等施設は、人材養成や学術研究の推進、社会貢献等、国立大学法人等の使命を果たすための礎であるとされている。

これまでの研究空間は知的活動として情報処理・知識処理を行うことを前提に、物理環境の整備を中心とした快適な空間・環境の構築がなされてきたが、今後は知的創造を刺激する空間・環境づくりが必要であると考えられる。

知的創造を刺激する空間の代表例としては、リフレッシュルームが挙げられるが、うまく活用されていないため、研究者間コミュニケーションが図れず、技術や情報がクローズにされる傾向にある。

そこで、本研究は大学の研究者の知的創造がどのような状況・場所で行われるかを明らかにするため、アンケート・ヒアリングにより研究空間・リフレッシュ空間の選択性について調査を行った。

2. 調査概要

(1) アンケート調査・ヒアリング調査概要

本調査は、状況別にどのような研究空間及びリフレッシュ空間を選択しているかを明らかにすることを目的としてK大学の研究室に所属している学生24名を対象として、アンケート調査及びヒアリング調査を行った。

アンケート調査については、ヒアリング調査の前に実施し、ヒアリング調査については2011年6月20日、27日の2日間かけて実施した。

アンケートの内容を表1に示す。アンケートは研究空間及びリフレッシュ空間について、状況別に選択させた。このアンケート結果に基づき、選択要因について詳細にヒアリングを行った。

(2) 調査対象大学・学生の属性

調査の対象とした大学はK大学理工学部キャンパスで、都市型のキャンパスではある。周辺には飲食店やコンビニエンスストアは少ない。

調査対象の学生の概要を図1に示す。建築系の某研究室に所属する学生で、学部4年生が6人、大学院生修士課程1年生が6人、2年生が9人、博士課程が3人の計24人。男女比は学年毎にばらつきがあるものの、全体として5:5である。対象とした学生全てに研究室に自席が与えられ

表1 アンケート概要

No.	大項目	小項目
1	個人に関する情報	性別、登校時間、帰宅時間等
2	休憩場所の選択	長時間の休憩場所、研究に行き詰った時の休憩場所、作業の合間の短い休憩場所
3	研究空間の選択	論文や書籍を読む場所、研究構想や研究計画をする場所、データの入力・集計場所、論文・レポートなどの文章作成の場所

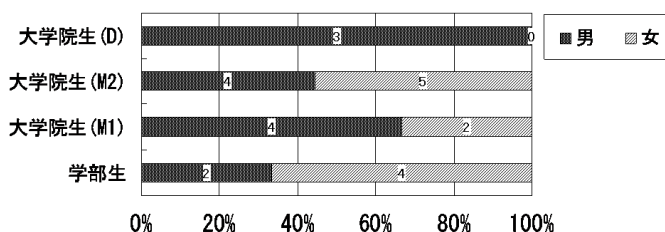


図1 アンケート対象学生概要

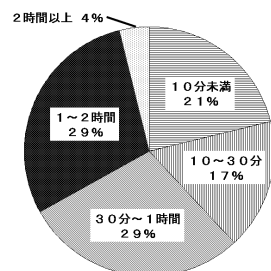


図2 通学時間

ている。図2に通学時間を示す。30分~1時間、1~2時間がそれぞれ29%と多く、次いで10分未満が21%、10~30分が17%、2時間以上が4%であった。

3. スペースの選択とその要因

3.1 休憩場所の選択

図3に状況に応じた休憩場所の選択状況について、図4にその選択要因について示す。

作業の合間の短い休憩については、研究室の自席が最も多い。ヒアリング結果では、研究室自席の選択理由としては、研究室内の学生との会話やインターネットを閲覧する学生が多かった。

次に、研究に行き詰った場合の休憩については、屋外または学外の施設が最も多かった。この場合は、屋外または学外の特定の場所に行き何かをすることが目的ではなく、

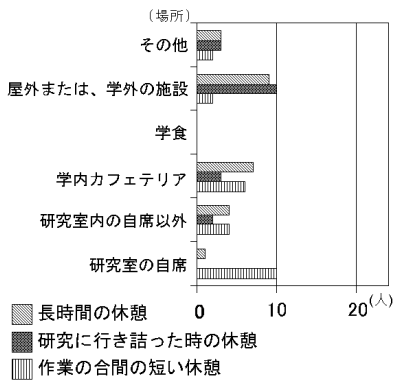


図3 休憩場所の選択

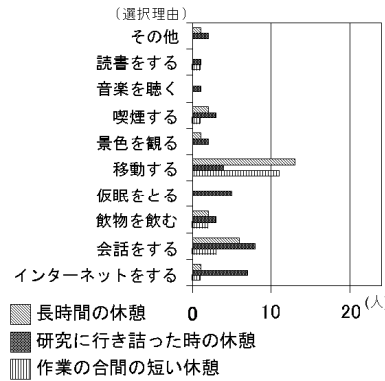


図4 休憩場所の選択理由

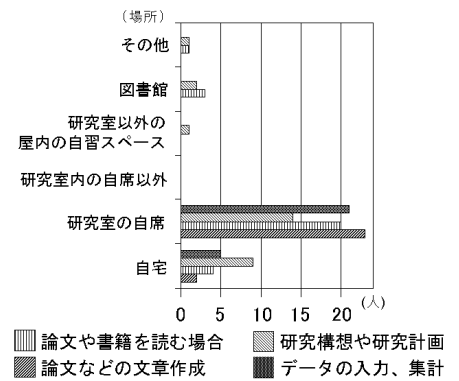


図5 研究場所の選択

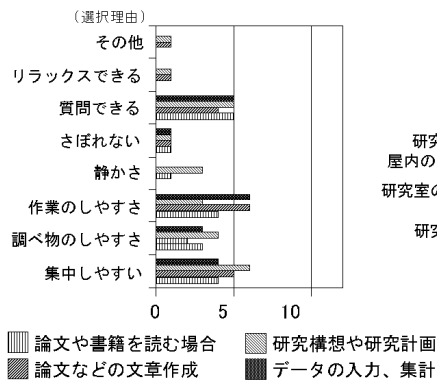
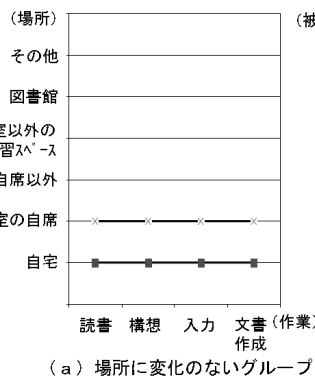
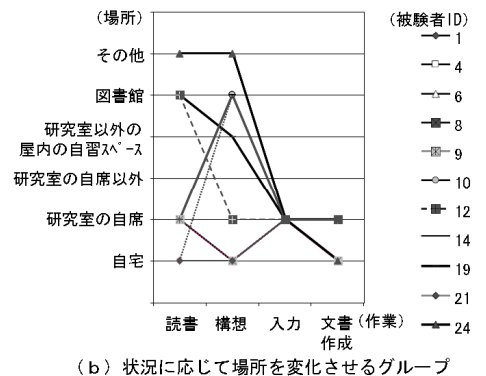


図6 研究場所の選択理由



(a) 場所に变化のないグループ



(b) 状況に応じて場所を変化させるグループ

図7 研究場所選択の変動パターン

ぶらぶらと歩くこと自体が目的だという回答が多かった。

長時間の休憩（昼食を除く）については、同様に屋外または学外の施設が最も多かった。ただ、長時間空き時間ができた場合は、帰宅するという回答が多かった。

以上の結果、状況に応じ休憩場所や方法を変えていることが分かった。ただ、個人の属性との相関はみられない。

3.2 研究場所の選択

図5に作業内容別研究場所の選択状況について、図6にその選択要因について示す。研究するための場所としては、研究室の自席が圧倒的に多いことがわかる。また、選択する理由はかなりばらつきが多くなっている。

ここで、作業内容に応じて研究を行う場所を変更しないグループ(a)と変更するグループ(b)の2つに分類した。図7に各個人における作業に応じた研究場所選択の変動パターンを示す。図7(a)の場所に变化のないグループは12人、(b)の場所を変化させるグループは11人とおよそ半分に分かれた(1人は欠損値)。(a)については、10人が研究室の自席で、1人が自宅であった。(b)については、読書や研究構想といったような、知的創造的作業においては選択する場所が多様であり、ばらつきが非常に大きかった。一方、入力や文書作成といったような情報処理、知

識処理作業については自宅や研究室自席のみでばらつきが少ない傾向にあった。この結果から、知的創造的な作業については、個人により空間の選択にばらつきがあることから、これまでリフレッシュ空間を与えていたように一般的な空間を提供するのではなく、様々なパターンの空間を設けておく必要があることが示唆される。

4. まとめ

本研究は大学の研究者の知的創造がどのような状況・場所でされるかを明らかにするため、アンケート・ヒアリング調査を行った結果、以下の知見を得た。

- 1) 研究に行き詰った場合の休憩については、屋外または学外で行うことが多かった。しかし、特定の場所に行き何かをすることが目的ではなく、ぶらぶらと歩くこと自体が目的だという回答が多かった。
- 2) 作業内容に応じて研究の場所を変更しないグループと変更するグループがおおよそ半数に分かれた。
- 3) 作業内容に応じて場所を変更するグループについては、読書や研究構想といったような、知的創造的作業においては選択する場所が多様であったが、入力や文書作成といったような機械的な作業については選択のばらつきが少ない傾向にあった。

*株式会社 岡村製作所 オフィス研究所
 **株式会社 エフ・エム・ソリューション
 ***名古屋工業大学 助教・博士 (工学)

*Okamura Corporation
 **FM Solution Corporation.
 ***Assistant Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.